

<研究報告>

<第15回学会大会記念シンポジウム>

地域文化とレクリエーション

司 会	田 畑 貞 寿 (千葉大学)
実践報告	丸 山 正 (八王子市レクリエーション協会)
パネリスト	足 立 省 三 (中日新聞)
	鈴 木 忠 義 (東京農業大学)
	田 中 祥 子 (津田塾大学)
	川 村 英 男 (本学会東海支部)
報告者	麻 生 恵 (東京農業大学)

はじめに

田畑 貞寿 (司会)

ここ数年の大会記念シンポジウムでは、「レクリエーション学の体系化とその領域別の課題」について整理・検討され、その成果は学会誌などにも報告されてきた。

今回は開催地が三重県伊勢市ということもあり、また当地が全国的な誘致圏をもつ観光都市であることから、地方的課題も多々あるように思われる。こういう中で多様なレクリエーション学の側面から地域の方へ目を向けてみたいというのが、本シンポジウムの趣旨である。この中にはレクリエーション学会と地域との接点を探るという問題もあろうし、また現代社会の問題を各研究者が如何に受け止め、如何に研究活動に結びつけてゆくか、という問題もある。

レクリエーションと地域との接点といっても多様多層な問題が含まれてくるわけであるが、特に地域文化運動や地域づくり、まちづくりといったものに対するレクリエーション関係者の役割とは如何なるものなのか、といったことも1つの課題になると思われる。また地域というものを通してレクリエーション学の目標や理念を再確認しようということもあると思う。さらにこれらが、レクリエーション学会あるいは実践活動をされているレクリエーション関係者の大きな課題ではないかと考えている。

そこで、実際に地域文化活動を広範に実践されて来

られた八王子市レクリエーション協会の丸山正氏に「地域社会でのレクリエーション文化の定着をめざして」ということで基調報告をお願いし、引続いて4人のパネリストの先生方にそれぞれの立場からお話をいただきたいと思います。

地域社会でレクリエーション文化の定着をめざして——東京都八王子市レクリエーション協会の地域活動事例紹介を通して——

丸山 正

1. 八王子市レクリエーション協会の活動の特徴

八王子市レクリエーション協会は昭和47年12月4日に発足したので、まもなく13年目を迎えることになる。この協会は、他にはみられないいくつかの特徴を有している。

第一の特徴は、当協会のすすめるレクリエーション運動の理念が、レクリエーション指導者の得意とする「ゲーム」、「ソング」、「ダンス」という3種目に加えて、さらに内容が多様化しており、文化の香り高いまちづくりを目指しているということである。第2の特徴は、レクリエーション指導者組織が一本化していることである。つまり、日本レクリエーション協会が認定しているレクリエーション指導者以外の、各種レクリエーション関係団体が認定している指導者や、その他指導者認定を行っていないレクリエーション関係

団体の指導者も含めてすべて一本化し、八王子市レクリエーション協会の指導者という位置づけで活動していることである。第三の特徴は「八王子いちょう祭り」をはじめ数々の市民代表のイベントを活発に開催していることであり、それは当協会を中心としながらも、それだけにとどまらず広範な団体、例えば町内会（自治会）7商店連盟、ライオンズクラブといった団体も含めて一緒に運動を展開していることである。

一方、カルチャースクールや専門学校を運営していることも大きな特徴としてあげられよう。カルチャースクールは現在13種類のコースが開設されており、市民にも大変人気がある。専門学校は「八王子市レクリエーション学園」と称して、西東京地区およびその近隣市町村のレクリーダー養成を目的としたものである。現在は専修学校であるが、将来は大学への発展を目指すものである。

以上が八王子市レクリエーション協会活動の概略的な特徴である。以下、重要な項目について述べるが、詳細については、「レクリエーション研究第14号」、「地域社会でレク文化の定着をめざして」(p 118~128)を参照されたい。

## 2. 行政からの独立

八王子市レクリエーション協会は最初から現在のような活動を目標としてきたわけではない。当初はレクリエーション団体協議会という形式で発足し、それが発展してレクリエーション協会となった。設立時に事務局は行政の中におかれ、また八王子市教育委員会の体育課が当協会を管轄した。しかし、こうした方式では経済的・経営的には様々な利点があるものの、活動や運動の対象がスポーツ・体育以外の広範な領域へ広がりにくいという難点があった。そこで1981年6月に事務局を民間のビルに移転することとした。これは大変きびしい選択であったが結果的には当協会の活動を飛躍的に拡大させることとなった。

現在の縦割り行政下では運動を他領域へ拡大することは大変難しく、広範に活動を展開してゆくには行政から独立することが先ず必要とされるのである。

## 3. 指導者養成組織の充実

独立後の大きな活動として、まちづくりへ向けてのレク指導者養成に力を入れたことがあげられる。

それまでの指導のあり方として、各分野の指導者に

よる運動が個別に展開され、ネットワーク化がなされていないという経緯があった。そこで当協会では、日本フォークダンス連盟や日本キャンプ協会といった各種レク団体がそれぞれ養成してきた指導者すべてを、当協会が指導者認定するという形式に改めた。つまり指導者資格の認定会を含めて講習会をすべて八王子市レクリエーション協会が行うようにしたわけである。

カリキュラムは、レクリエーション原論やレクリエーション組織論などを共通の基礎科目とし、その上に各種目団体の指導者養成規定に基づいたカリキュラムを載せるという方式をとっている。したがって当協会では、各種目団体の指導者はすべてレク指導者であるという位置づけをしている。

また当協会ではこうした指導者に加えて、体育指導委員や社会教育関係指導者もすべてレク指導者と呼んでいる。さらに資格や肩書をもたなくても実質的にレク指導に携わっている人、例えば施設を訪問して子供たちに紙芝居を見せたり、本の読み書きを指導している一般の主婦のような人達も、同様にレク指導者という位置づけを行っている。

これらの指導者は当協会の指導者バンクに登録されるが、このバンクには華道、着付、長唄といった稽古事の師匠も含まれている。

こうした広範な人材による総合的な指導者組織が、市民に旧来のレクリエーションから脱皮させ、その幅広さを認識させる大きな役割を果たしていると考えている。

## 4. イベントによる運動の展開

独立後の活動のもうひとつの柱は、レクリエーション運動を如何にして展開してゆくかということである。その方策として2つの中心的イベントを考えている。

1つは“手づくりの文化”であり、「八王子いちょう祭り」や「七福神めぐり」、「市民レクリエーション大会」などがある。「いちょう祭り」は、八王子市が甲州街道の小仏の関に位置しており、その追分から高尾駅まで773本のイチョウ並木が植えられていることや、かつての織物の町と現在の学園都市、新旧住民、といったもののハーモニーを作ろうということ企画されたものである。先述した広範な団体の協力と2000万円の予算により、昨年（1984年）は25万人の参加者があり、今年は30万人を目標にしている。

もう1つは、世界の第一級の芸術品に直接ふれても

らおうという運動である。例えばオランダの木管合奏団やウクライナの歌舞団などを低料金で観覧できるようにしている。これも市民に大変好評である。以上のように、私たちはレクリエーション運動が単に歌やダンスやゲームの指導といったレベルでは全く市民を巻き込んだ運動として広がって行かないことを認識している。レク指導者のレベルを高めながらも当協会が中核となって21世紀の精神面での深みのある運動へと展開してゆく必要がある。これからも更に勉強を重ね、文化の香り高いまちづくりを目指したいと思っている。

## 地元ジャーナリストの立場から

足立 省三

地域文化とレクリエーションについて2つの視点からお話したいと思う。

第1は、中部地方が自然公園の多い地方であり、また一方で首都圏、近畿圏にはさまれ、高速道路網が発達してきて、自然公園地域に沢山の利用者が入り込むようになった。それにつれてレクリエーション活動、特に山岳のレクリエーション活動のあり方にも多くの問題が発生してきている。

かつて山岳地帯には山岳特有の生活スタイルというものがあった。ところが現在では、中部山岳の山小屋は巨大化し、千数百人収容可能というように変化している。登山者はそれほど苦労することなくそこに到達することができる。彼らにとっては、すでに自然と人間との親密な関係を失っているので、都会の生活と同じようなものを要求している。その結果、山岳地帯での環境破壊が深刻な問題として発生してきた。

こうした問題に対して、かつての日本の山村が保持してきた山岳における暮らしの知恵というものに注目し、それを新しい視点で評価し直すことが必要であると考ええる。野外において自然と人間との関係を取り戻せるような、また楽しい遊びやグループ活動ができるような、つまり生活体験を通したひとつの合宿拠点のようなものが必要となる。長野県大町市にある山岳自然博物館や東京教育大の活動から生まれた子供達の学習施設などはその例である。こうした自然と人間との関係を強化し、それを見直すような拠点を造っていく必要がある。

フランスで1970年に出された環境に対する100項目のレポートがあるが、その中で環境教育について、冷

えきった若者の目を環境変化に対していかに引きつけるか、ということが重要なポイントであると述べている。こうしたことも今後重要になると思っている。

もう1点は、コミュニティづくりとレクリエーションである。コミュニティもレクリエーションも住民自治につながる地域生活の共同基盤というように考えるとすれば、それに対してコミュニティ活動が広がっていく過程というのは、住民参加のしかたで2つのタイプがある。ひとつはクラブ活動型から広がっていくタイプ、もうひとつは生活環境型から広がっていくタイプである。これらを通し、地域の活動情報といったものが横につながってゆくということが最も重要である。今日の地域社会は、多くは補助金などの関係で縦割りになっているので、老人クラブや子供会などの情報は地域の中ではつながってゆきにくい。これらの互いの活動団体の情報を横につないでゆくところに重要な意義がある。これは行政においても同様であり、コミュニティ活動を新しく進めてゆく場合には、連絡会議といったものを市町村役場内に設ける必要があろう。

先ほどの八王子市レクリエーション協会のお話を聞いてこれはすごいと思ったが、かつて昭和40年代に静岡県龍山村というところで森林組合が中心となって村づくりを積極的に推進した事例があるが、この中にはレクリエーションによるまちづくりという昭和50年代後半以降の新しいテーマがすでに提唱されていたと考えている。

また公共投資による市民会館建設などハードの施設づくりが増えて、いわゆるハコモノの都市づくりと言われるわけだが、これを如何に使いこなすかということで、八王子に学ぶところが大きいと考えている。地域文化を育てるような都市づくりの方向に、如何に持ってゆくかということに対して、非常に良い示唆をいただいたと思っている。

## 観光・レクリエーション論の立場から

鈴木 忠義

地域、文化、レクリエーションという3つの言葉が出てくるが、確かに人間は共同社会の中でしか生きられないわけで、今日それがより高度化してきている。

しかし一方では、人間疎外の傾向が強まっているともいえる。例えば、水道ができたために井戸端会議がなくなり、各戸が風呂をもつようになったために銭湯